青年期の友人関係とバウムテストに見られる特徴との関係

吉田芙悠紀*　松下姫歌*

Relation between friendship patterns and features shown in Baumtest in adolescence

Fuyuki Yoshida*　Himeka Matsushita*

The purpose of this study was to examine relationship between adolescents' friendship patterns and features shown in Baumtest. This study found four patterns of friendship of adolescents from different tendency ; ⅰ) the tendency to have positive relationship with their friends, ⅱ) the tendency of to take care not to hurt each other.

This study examined these each pattern's quest for their selves in terms of features shown in Baum, "apical termination" and item in trunk, i.e., shadow.

Key words: adolescents' friendship patterns, Der Baumtest (The Tree Test), apical termination

問　題

1.　青年期の友人関係

青年期の友人関係は，年齢ともに，深く親密な関係に発展していくとされている。青年期には，自己と友人との類似性・同質性だけでなく異質性をも視野に入れ，自分と友人とがそれぞれ一個の個人であることを認め合うようになる(Damon,1983　山本訳,1990)。このように，この時期に深い友人関係を築いていく過程には,青年各々が自己探求の作業に取り組むという重要な意味合いがある。

しかし，1980年代頃から，わが国では，青年期の友人関係の特徴として，表面的な関係にとどまる傾向が指摘されている。青年たちは，相手と深く関わらずに表面的な関係を保つことで，新たな自己を探求していくという作業を避けているのだろうか。この点に関して，青年たちが，相手と深い接触が出来ない一方で孤独感を訴えたり，人との関わりを避けてはいるが内心は親密な関わりを望んだりしていることが指摘されている(小此木,1980；町沢,1992；岡田,1999)。つまり，表面的な関係を築くことで相手との衝突を避けて単純に楽になっているのではなく，そこには自己を探求し，友人関係を築いていく何らかの希求があると考えられる。以上のことをふまえると，青年の友人関係を“浅いか，深いか”というような外からの見え方だけで捉えるのではなく，その関係の中で，青年がどのように自己を探求しようとしているのかについて検討していく必要があると考えられる。

* 広島大学大学院教育学研究科（Graduate School of education, Hiroshima University）

岡田(1995)は，表面的な友人関係のあり方にも，質的に異なるパターンがあることを実証的に見出している。岡田(1991,1993,1995,1998,1999)は，一連の研究において，これらのパターンが質的にどう異なっているのかについて，内省や自己意識など複数の観点から検討している。しかし，上述のような自己の探求プロセスの観点からの検討はなされておらず，友人関係のあり方と，新たな自己を見出し，確立していくという課題への取り組みとの関連については明らかにされていない。

この点に関し，吉田・松下(2007)は，現代大学生の友人関係には，相手と内面的に深く関わろうとしたり，相手を楽しませようとしたりする「積極的関わり」の側面と，その場の雰囲気や相手の顔色をうかがって関わる「気づかい」の側面の二側面があることを見出した。そして，「積極的関わり」の側面には，自己と他者とを切り離して捉えつつも，他者との関係の中で自己を捉えるというあり方が，「気づかい」の側面には，他者との異質性や自己の個別性は視野に入れにくく，他者との関係の中で自己を捉えるあり方が関係していることが示された(吉田・松下,2007)。この結果から，友人関係の持ち方のパターンは，自己の捉え方の背後にあると考えられる，新たな自己を探求し確立していくという課題にどう取り組み，どうつまずいているのかといった側面が関わってくることが推察される。そこで，本研究では，青年が，自己といえるものを見出していく過程において，他者との関係の中で自己探求の課題にどのように取り組み，どのようにつまずいているのかについて検討していくこととする。このような取り組みと友人関係との関連を捉える方法として，バウムテストを使用する。

2. バウムテスト

バウムテストとは，A4 版の白画用紙に木を描いてもらうことが課題の描画法である。もともとは職業相談家であった Jucker が，診断の補助として樹木画を適用することを提唱し，その考えを Koch が受け継ぎ，現在の方法として編み出された。

Koch(1949　林・国吉・一谷訳,1970)は，木と人間の差異として，植物はすべてが外に向かおうとする開放系であるのに対し，人間はあらゆるものは内に向かう閉鎖系であることを指摘した。その上で，「木の法則は内なるものを外に押し出すことであり，人間の心がその法則に従う」と述べ，人は樹木画に対して自分の存在を投入するものであるとしている。

松下(2005)は，木の成長のイメージと，人間の心のイメージとを対応させて，「根は，地中の眼に見えないところで，あらゆるものに対して開かれ，自分をつくるもととなるものを吸い上げ，幹を作り，支えていく。これらは無意識のイメージとつながる。幹は“自分のもの”として獲得され，常に更新されてもいる。そして，幹から枝葉が外に向かって分かれていくことは，すなわち“自分”と感じられているものと，内界・外界との関わりと通して，さらに分化させてつかんでいくイメージとつながる。」と述べている。以上のような木の成長イメージは，青年期に，友人との関わりの中で，自分自身の個別性に気がついたり，相手との共通性を見出して自己を捉えたりすることで，新たな自己像を獲得していくイメージと重なると考えられる。そのため，バウムテストを用いることで，新たな自己像に気づき心理的に自立していく渦中にある青年が，どのように自己をつかみとっているのか，あるいはつかみとるに至らずに，どこでつまずいているのかといった今取り組んでいる課題を読み取っていくことが出来ると考えられる。

3. 幹先端処理

以上のような心の課題に取り組む作業を読み取っていく一つの観点として，「幹先端処理」(藤岡・吉川,1971)が挙げられる。藤岡・吉川(1971)は，解析的に着眼点を定め，バウムの部分的な特徴によって仕分けていく方法では「バウム全体の印象はバラケルばかり」であると述べ，全てのバウムを一貫した態度で眺められるような視点の必要性を指摘し，「幹先端処理」という概念を提唱した。「幹先端処理」とは，「二本線で構成された幹の先端をどう描くか，どう処理するかという描画行為上の課題という視点」(鶴田,2005)である。この視点は，「全体的印象を大切にしながら，なおそれを代表するような，ここを見れば全体を感じ取ることができるといういわばバウムのへそのようなものを探した結果見出された視点」である(鶴田,2005)。

1) 幹の閉鎖・開放

山中(1976)は，「幹先端処理」の概念を発展させ，幹先端が開いたまま，閉じられない「幹上開」について，統合失調症患者に見られる特殊なタイプ「漏斗状幹上開」や「メビウスの木」を見出している。「漏斗上幹上開」は，幹が二本線で描かれ，幹先端に向かうほど幹の幅が広くなるものである。また，「メビウスの木」は，「漏斗状幹上開」のうち，幹の内空間に外空間が突如形勢されるように見えるバウムである。これらは内空間が外空間とつながっている状態であり，統合失調症患者の，心的な自－他の区別，内界と外界の区別のつきにくさとして言及される問題である(松下,2005)。また，このような問題は，「大きな意味では通常の幹上開にも共通する点である」(松下,2005)。岸本(2000)も，自他や内外，事物の「境界」の脆弱性と幹上開とが関連することを報告している。

これらは，臨床群を対象とした問題として挙げられているが，松下(2005)は，幹上開に内包される問題について，「健常とされる心のいとなみとの連続性」を指摘している。松下(2005)は，「相手の気持ちを汲んだり，その中でいろいろと感じたりするとき，いったいどこまでが相手の気持ちであったりどこまでが自分の気持ちであったりするのかという問題は，本来突き詰めるとわからなくなってしまう」問題であると述べている。そして，平行ないしは先すぼまりの二本線で描かれ，幹の上開部を包みこむような樹冠を形成する包冠線が描かれるバウムは，一般に青年期に特徴的なバウムの一つとされている(松下,2005)。

心理的に自と他をどのように区別して捉えていくかという「すべての人に共通する問題」(松下,2005)は，相手との同質性・共通性を通じて自己を捉えつつ，異質性をも視野に入れていくことによって新たな自己を確立していく青年期の課題とも大きく関連していると考えられる。自己といえるものを確立していく過程で，友人と自分との気持ちに区別をつけて捉えていると，相手の気持ちに自分が揺るがされることも少ない。しかし，友人と自分との共通性が視野に入りやすく，どこまでが自分の気持ちで，どこまでが相手の気持ちであるのかの区別がつきにくくなったり，自然と相手の気持ちや顔色に自分の気持ちが影響されたりすることがありうる。そのことに気がつくこともあれば無意識の間に影響され，全く気がつかないままその場が過ぎることも多い。その際に，自分なりに相手と自分の気持ちを切り分けようとしたり，曖昧にしたままで進んでいったりするなどの対処をしながら，各々自己をつかむ作業に取り組んでいると考えられる。このような心的なレベルでの自と他の区別の仕方や対処の仕方によって，相手への関わりも変わってくると考えられる。

以上のことを踏まえると，二本線で描かれる幹の先端が開放するか閉鎖するか・閉鎖している際の閉鎖のあり方・幹が開放している際の対処の方法と，青年期の友人関係のあり方とは関連すると考えられるため，本研究で検討することとする。

2) 枝の分化

また，幹先端処理に対する方略として，奥田(2005)は，「分化」と「包冠」を挙げている。「分化」とは，実の内実・エネルギーを何らかの方向付けをして処理することであり，「包冠」とは，一定のエリアを形成することで先端を包んで処理することである(奥田,2005)。山川(2005)は，「分化」について，「幹のエネルギーをそのまま伸ばしていくこと」であり「具体性・直接性による幹への対処」であるとしている。一方，「包冠」は「木の在る姿を対象化して認識するからこそ」なされることであり，「抽象性・間接性によって幹へと接する」ことであるとしている。また，これらは，背反するものではなく，同時に成立しうるものである(奥田,2005；山川,2005)。「分化」は幹からどう展開していくかに重きを置いたものであり，「包冠」は外界や周囲との間に何らかの境界領域を作ることに重点を置いた方略である(奥田,2005)。以上二つの作業，すなわち，自らをどのように展開させていくかという「分化」の作業と，周囲との関係をいかように作っていくかという「包冠」の作業は，友人とどのように関わっていくかという問題と関連すると考えられる。本研究では，これらのうち，枝の「分化」を取り上げることとする。枝を分化させる際には，自分の中に沸き起こる心的エネルギーを救い上げ，それを分化させ，外にいかに出していくかという作業に取り組まれていると考えられる。このような作業は，青年期に行われる自己探求のプロセスと重なるものがある。「分化」させていくことについて，松下(2005)が，「自分をどうつかむかということと関係している」と述べていることからも，枝の「分化」のありようは，青年期の課題と関連すると考えられる。また，一度分化した枝からさらに枝が派生していくイメージは，つかんだ自己を他者に表出し，それに対する相手の反応や相手との関係を対象化し，さらに自分自身を方向付け，新たな自己像を獲得していくイメージと重なると考えられる。

以上のように，枝を分化させることそれ自体や，枝をどのように分化させていくかということは，友人関係のあり方と関連すると考えられるため，本研究で検討することとする。

4. 幹への描きこみ

また，幹先端処理以外の観点として，本研究では幹への描きこみの有無を取り上げる。Koch(1949 林他訳,1970)は，幹が「中心をなし，真ん中にあり，支え」であることや，バウムの「本体を構成」することを指摘している。また，奥田(2005)は，「幹にはバウム全体の芯となるような，比較的不変の，安定した，どこかバウム自身の本体的な感じがある」，「そこにはある種のボディ感，どっしりとした実在感をもった重みを生じさせる部位である」と述べている。このように，バウムの幹は，中身を伴った自分の中心であることが推察される。奥田(2005)は，我々が「幹という中身あるものに，自らの身体の重みを伴って」，「主体感を入れ込んでいるところ」があることを指摘している。このような幹を，空白にしておくことが出来ずに，何らかの描きこみがなされることには，自分自身の存在や実感，主体的な感覚，葛藤，自己感のようなものを感じていることが関係してくると考えられる。一方で，空白のまま幹が先端まで伸びることは，自己というものを成長させていくとき

に，実感したり疑問に感じたりして立ち止まることなく進んでいくことと関連してくるであろう。

以上のような自分自身の中身，感覚，葛藤をどう感じるかという問題は，友人との関わりで影響されたり，関わり方に影響を与えたりするなど，友人関係のあり方と相互に関わってくると考えられる。そこで，幹への描きこみの有無と友人関係のあり方との関連について検討する。

5. 本研究の意義

本研究では，上述のように，バウムテストのあり方から，青年期探求の課題への取り組み方を読み解いていくことが可能であるという立場から，①幹先端の閉鎖・開放，②幹先端の枝の分化のさせ方，③幹への描きこみという観点から検討し，そうした課題の取り組みが，友人関係の特徴とどう関わるかについて考察していく。このことにより，外からは“希薄である”“深く関わっている”と表面的に捉えられがちな友人関係のあり方が，青年自身にとってどういった意味があるのかということや，具体的にはどういうつまずきのあらわれであるのかということについて考えることが出来ると考えられる。

目　的

本研究は，新たな自己を見出していくという青年期の課題の取り組みが，友人関係の特徴とどのように関連するのかについて，バウムテストの幹先端処理のあり方，枝の分化の仕方，幹への描き込みに注目することによって検討することを目的とする。

方　法

調査対象者　質問紙調査への協力が得られた大学生 326 名(男性 133 名，女性 193 名，平均年齢 20.48 歳，*SD*=1.14 歳)。このうち，バウムテストへの協力が得られたのは 110 名(男性 38 名，女性 72 名，平均年齢 20.11 歳，*SD*=1.58 歳)であった。

調査時期 2007 年 7 月～2007 年 11 月であった。

調査内容 ①友人関係尺度(岡田.1995)，②バウムテスト

手続き　集団法で行った。バウムテスト実施の際は，A4 版の白画用紙，4B の鉛筆，消しゴムを手渡し，「実のなる木を一本描いてください」と教示した。描き終わったら画用紙の裏に名前と日付を描くよう求めた。質問紙調査は，バウムテスト実施よりも前の日に行うか，バウムテスト実施直後に続けて行った。

結果と考察

1. 友人関係尺度の得点による類型化

質問紙調査に協力が得られた 326 名について，友人関係尺度の各因子(「積極的関わり」因子，「気づかい関係」因子)得点の中央値を基準として，高群，低群に分類し，それぞれの組合せにより 4 群(積極的関わり高，気づか

Table1
友人関係群の内訳人数(人)

友人関係群	全体の人数	バウムテスト協力者人数
HH群	110	48
HL群	66	17
LH群	75	31
LL群	75	14
計	326	110

い高，以下 HH 群；積極的関わり高，気づかい低，以下 HL 群；積極的関わり低，気づかい高，以下 LH 群；積極的関わり低，気づかい低，以下 LL 群)に分類した。このうち，バウムテスト協力者は，HH 群 48 名，HL 群 17 名，LH 群 31 名，LL 群 14 名であった(Table1)。

1) 質問紙から推察される各群の特徴とバウムに表現される特徴の予測

HH 群は，自ら相手に積極的に関わる傾向が高く，相手の気持ちやその場の雰囲気に合わせて関わる傾向も高い群であるといえる。この群の青年は，相手に自己を主張することで関わりの中で自己を確認しようとする姿勢があり，自己の捉えにくい側面に関しては，相手に融合させ合わせることで自己を変化させていく姿勢も持ち合わせていると考えられる。

相手に合わせていくことで自己を変化させていくことからは，バウムの幹先端は開放されることが予想される。また，相手に対して積極的に関わりつつ相手との間でも自己を変化させつかもうとしている姿勢からは，枝が徐々に細かく分化していくことが予想される。さらに，相手に積極的に関わって相手との間で自己を確認し，つかみにくい部分は相手と融合させて捉えていこうとする姿勢からは，自己探求に積極的で，内省力があり，自己感や葛藤を感じやすいと考えられるため，幹への描き込みが多くなされると考えられる。

HL 群は，自ら相手に積極的に関わる傾向が高い一方，その場の雰囲気や相手の気持ちに気を配って関わる傾向は低い群であるといえる。この群の青年は，相手と関わろうとする姿勢はあるものの，関わりの中で自己を相手と融合して捉え変化させていく傾向は低いと考えられる。

相手と自分とを融合させて新たに自己を捉えるという傾向が低いこと，自己を積極的に表出していく傾向が高いことから，自己と他者を切り分けて捉えていると考えられるため，バウムの幹先端は閉鎖されることが予想される。自己表出をした後，周囲からの反応やその場の雰囲気を敏感にキャッチして新たに自己を変化させつかみとっていく姿勢は低いと考えられるため，枝は分化するが，出した枝からさらに枝が派生することは少ないことが予想される。

LH 群は，相手に一歩踏み込んで関わる傾向は低く消極的であるが，相手に気をつかい，その場の雰囲気に合わせて関わる傾向は高い群であるといえる。この群の青年は，自己を相手に対してどう表出してよいか分からないが，相手に自己を融合させることによって自己を変化させ捉えていこうとしていると考えられる。

相手に合わせていくことで自己を変化させていくことから，バウムの幹先端は開放されることが予想される。相手に対して自己をどう表出してよいか分からない側面があることから，枝が分化することは少ないことが予想される。一方で，相手に合わせて自己を変化させていくことは，その場を対象化しながら自己を出していく姿勢であると考えられるため，枝が細かく派生することも予想される。この群では，枝の分化に関しては明確な特徴が見られないかもしれない。

LL 群は，相手に対して積極的に関わる傾向が低く，相手の顔色や場の雰囲気をうかがってその場に合わせて関わる傾向も低い群であるといえる。この群の青年は，自ら他者と関わろうとはせず，相手と自己とを切って捉えようとしていると考えられる。相手との間で自己探求をするという姿勢が乏しく，自己が変化していくことには消極的であると考えられる。

相手と自己とを切り離して捉えようとしていると考えられるため，バウムの幹先端は閉鎖される

ことが予想される。また，相手への関わりに乏しいところから，相手に対して自己を表出していくことが少なく，枝の分化はなされにくいと考えられる。自己探求をする姿勢の乏しさからは，実感や自己感のようなものがまだ自分のものとしてリアルに感じられていない可能性があり，幹への描き込みがなされにくいことが予想される。

以下では，それぞれの友人関係パターンが示す，自己・他者への関与のあり方や，つまずきのあり方について，バウムテストを用いて検討する。上述の予想から，以下の仮説を立てた。

仮説 1：幹の閉－開に関して，相手と自己とを融合させて捉えようとする HH 群，LH 群では開放型が多い。相手と自己とを融合させることに消極的な HL 群や，相手と自己とを切り離して捉えようとする LL 群では閉鎖型が多い。

仮説 2：幹の閉鎖のあり方として，HL 群では，分化した枝から枝が派生しないバウムが多く見られる。LL 群においては枝が分化しないバウムが多い。

仮説 3：幹の開放型において，HH 群では枝が細かく派生するバウムが多い。

仮説 4：幹先端における枝の分化に関して，相手に自己を表出する傾向が高い HH 群や HL 群では枝が分化するバウムが多い。一方，「積極的関わり」傾向も相手に合わせて自分を捉えていく「気づかい関係」傾向も低い LL 群では枝が分化するバウムは少ない。

仮説 5：枝の分化のあり方に関して，自己表出したり，相手に合わせたりしながら自己をつかんでいく HH 群では，枝が徐々に分化するバウムが多く見られる。自己表出するものの，変化を望みにくい HL 群では，枝から枝が派生するバウムは少ない。

仮説 6：自己の感覚に敏感であると考えられる HH 群では，幹へ描き込みのあるバウムが多い。自己をつかむことに消極的であると考えられる LL 群では，幹が空白のバウムが多い。

以下では，これらの 6 つの仮説について検証していく。

2. 友人関係パターンに見られるバウムテストの特徴

1) 幹先端の閉鎖・開放のあり方

①幹先端処理のあり方の分類

協力者 110 名分のバウムを，幹先端の閉鎖・開放のあり方の特徴によって分類した。具体的な分類基準は Table2 の通りである。

Table2
幹先端の閉鎖・開放の特徴の類型と分類基準

バウムの類型	説明
1)「閉鎖型」	二本線で描かれた幹の先端が閉じているもの。
①「派生型」	幹先端部において枝分かれが見られ，分かれた枝からさらに枝が派生するもの。あるいは，幹先端部において枝分かれが見られた時点からさらに幹が伸びることにより，徐々に枝分かれしているもの。
②「放散型」	幹の先端部の一時点で一気に放散状に枝分かれし，更なる枝分かれが見られないまま閉じられているもの。
2)「開放型」	二本線で描かれた幹の先端が閉じずに開放されたままになっているもの。包冠線や樹冠の線などで幹先端に蓋がされていたとしても，幹を構成している線によって閉じられていなければ，「開放型」とみなす。
①「枝あり」	樹冠部において，幹先端から枝の分化が見られるが，その先端は閉じられていないもの。包冠線で示されている樹冠部よりも下部で見られる枝は含まない。
②「枝なし」	幹先端から枝の分化が見られないもの。包冠線で示されている樹冠部よりも下部で枝が見られたとしても，樹冠部で枝の分化が見られなければ「枝なし」に分類。

Table3
友人関係各群における幹先端の開放・閉鎖の類型の人数(人) ※( )内は群内での出現率(%)

群	閉鎖型		開放型		計
	派生型	放散型	枝あり	枝なし	
HH群	7(15%)	10(21%)	16(33%)	15(31%)	48(100%)
HL群	0(0%)	9(53%)	4(23%)	4(24%)	17(100%)
LH群	3(9%)	9(29%)	12(39%)	7(23%)	31(100%)
LL群	1(7%)	2(14%)	7(50%)	4(29%)	14(100%)
計	11(10%)	30(27%)	39(36%)	30(27%)	110(100%)

上述の分類基準によって，臨床心理学を専攻する大学院生1名に，調査者とは独立に分類してもらったところ，評定者間一致率は98%であった。評定が不一致であったバウムに関しては，評定者間の協議の上決定した。友人関係の群ごとにバウムの各類型の度数および出現頻度を算出すると，Table3の通りであった。

②幹自身の閉鎖・開放：仮説1について

「閉鎖型」「開放型」の出現度数について，友人関係の群による偏りが見られるかどうか検討するためにχ^2検定を行ったところ (Table4)，有意な偏りは見られず($\chi^2(3,110)=3.39, n.s.$)，仮説1は支持されなかった。

Table4
友人関係各群における「閉鎖型」の度数(人)とχ^2検定の結果
※( )内は群内での出現率(%) 下段は期待度数(人)

群	閉鎖型	開放型	計	p
HH群	17(35%)	31(65%)	48(100%)	*n.s.*
	17.89	30.11		
HL群	9(53%)	8(47%)	17(100%)	*n.s.*
	6.33	10.67		
LH群	12(39%)	19(61%)	31(100%)	*n.s.*
	11.56	19.45		
LL群	3(21%)	11(79%)	14(100%)	*n.s.*
	5.22	8.78		
計	41(37%)	69(63%)	110(100%)	

Table4より，「開放型」に分類されたバウムは全体では63%であり，半数以上の協力者が「開放型」のバウムを描いた。自己と他者とを融合させ，他者に合わせて自己を変化させていく「気づかい関係」の傾向の高いHH群，LH群だけでなく，HL群，LL群においても多く「開放型」のバウムが見られたといえる。

このことから，HL群の，相手に気をつかわず自己を主張していく態度の背後には，実は相手から影響されやすく自己を見失ってしまう可能性があるために，自己を保とうとする心の働きがある可能性がある。またLL群においても，相手とあまり関わらずに自己と相手とを切り離して捉えようとする態度の背後に，相手から影響を受けやすく自己が崩れやすい側面がある可能性がある。また，どの群においても，心的レベルにおける自－他，内－外のあり方には，群内で幅があると考えられる。

③ 「閉鎖型」の枝の処理の仕方：仮説2について

i)「派生型」

「閉鎖型」の枝の処理の仕方として，「派生型」に分類されたものの出現度数について，友人関係の群による偏りが見られるかどうかを検討するために，「派生型」に分類されたものと，それ以外に分類されたものと

Table5
友人関係各群における幹先端の「派生型」の度数(人)とχ^2検定の結果
※( )内は群内での出現率(%) 下段は期待度数(人)

群	派生型	その他	計	p
HH群	7(15%)	41(85%)	48(100%)	*n.s.*
	4.80	43.20		
HL群	0(0%)	17(100%)	17(100%)	*n.s.*
	1.70	15.30		
LH群	3(10%)	28(90%)	31(100%)	*n.s.*
	3.10	27.90		
LL群	1(7%)	13(93%)	14(100%)	*n.s.*
	1.40	12.60		
計	11(10%)	99(90%)	110(100%)	

でχ^2検定を行った結果(Table5)，有意な偏りは見られなかった($\chi^2(3,110)=3.14$,*n.s.*)。

ii)「放散型」

次に，「閉鎖型」の枝の処理の仕方として，「放散型」に分類されたものの出現度数について，友人関係の群による偏りが見られるかどうかを検討するために，「放散型」に分類されたものと，それ以外に分類されたものでχ^2検定を行った結果(Table6)，有意な偏りが見られた($\chi^2(3,110)=7.90$,$p<.05$)。残差分析の結果，HL 群において「放散型」が多く描かれることが示された。

Table6
友人関係各群における幹先端の「放散型」の度数(人)とχ^2検定の結果
※( )内は群内での出現率(%) 下段は期待度数(人)

群	放散型	その他	計	*p*	多重比較
HH群	10(21%)	38(79%)	48(100%)	*n.s.*	
	13.09	34.91			
HL群	9(53%)	8(47%)	17(100%)	$p<.05$	放散型>その他
	4.64	12.36			
LH群	9(29%)	22(71%)	31(100%)	*n.s.*	
	8.46	22.55			
LL群	2(14%)	12(86%)	14(100%)	*n.s.*	
	3.82	10.18			
計	30(27%)	80(73%)	110(100%)		

「放散型」に関して，松下(2006)は，「自己感のもとのようなものは感じられている」が，それは「混沌として未分化なままであり，それがどういう気持ちなのか自分でもはっきりと把握することが難しい」と述べている。このことから，HL 群は，未分化な気持ちを自分で意識的に把握することに難しさがありながらも，自己感のもとのようなものがどこかで感じられていること，無自覚のうちにつかみとったものを枝として出すが，すぐに幹を閉じることによって自己を相手とは切り離して捉え，自分なりのまとまりをつけようとしていることが推察される。

以上より，幹の閉鎖のあり方として，枝の分化は見られるがそれ以上には枝が派生しない「放散型」が HL 群に多いこと，枝から枝の派生が見られる「派生型」は HL 群では一切見られないことが示され，仮説 2 は一部支持されたといえる。ただし，枝から枝が派生しないという特徴だけでなく，幹から枝が徐々に分化する形も見られないという特徴が見出された。

また，LL 群においては，閉鎖のあり方として，枝は派生しないことが予想されたが，Table3 に示されているように，「閉鎖型」において枝が分化しないバウムは見られなかった。つまり，LL 群の「閉鎖型」においても枝の分化が見られ，仮説 2 の一部は支持されなかった。LL 群は，他者に対して積極的にも関わったり，自己を他者に合わせたりする姿勢は低くとも，自分の中に沸き起こる心的エネルギーを救い上げて分化させるという心の作業が行われていることが推察される。

④「開放型」における枝の有無：仮説 3 について

「開放型」のバウムにおいて，幹先端の処理の仕方として枝に注目し，「開放型」の「枝あり」に分類されたバウムの出現度数に，群による偏りが見られるかどうかについて検討するために，χ^2検定を行ったところ(Table7)，有意な偏りは見られず($\chi^2(3,110)=2.59$,*n.s.*)，仮説 3 は支持されなかった。

Table7
友人関係各群の「開放型」における「枝あり」の度数(人)とχ^2検定の結果
※( )内は群内での出現率(%) 下段は期待度数(人)

群	枝あり	その他	計	*p*
HH群	16(33%)	32(67%)	48(100%)	*n.s.*
	17.02	30.98		
HL群	4(24%)	13(76%)	17(100%)	*n.s.*
	6.03	10.97		
LH群	12(39%)	19(61%)	31(100%)	*n.s.*
	10.99	20.01		
LL群	7(50%)	7(50%)	14(100%)	*n.s.*
	6.96	9.04		
計	39(35%)	71(65%)	110(100%)	

幹自体が開放されている際，その開放の処理として枝を分化させるという方法は，友人関係のパターンに関わらず，全体を通してある程度の割合で見られたといえる。自己を他者と区別したものとしてはっきりと捉えにくい際の方向づけのあり方は，直接友人関係パターンに反映されるものではないと考えられる。

2) 枝の分化のあり方

①枝の分化の分類

協力者 110 名分のバウムを，幹先端における枝の分化のあり方の特徴によって分類した。この際，枝先や幹の先端が閉じているかどうかは問わずに分類した。分類基準は Table8 に示した。

Table8
幹先端の枝の分化の特徴の類型と分類基準

バウムの類型	説明
1)「枝あり」	幹先端において枝の分化が見られるもの。ただし，包冠線や，枝・葉で構成される樹冠部より下部に見られる部分は幹先端とは見なさず，樹冠部での枝に限定した。
①「派生型」	枝の分化時点からさらに幹が伸びることにより，徐々に枝分かれしていくもの。
②「放散型」	幹先端の一時点で枝が一気に放散状に分化し，それ以上幹が伸びないもの。
・「派生あり」	分化した枝からさらに枝が派生するもの。
・「派生なし」	分化した枝から枝の派生が見られないもの。
③「きざし」	枝が伸びていくきざしは見られるが，幹の延長や影のようにも見え，はっきりと枝とはみなしにくいものや，幹の部分とのつながりが悪く，まだ枝になりきれていないもの。
2)「枝なし」	幹先端部において枝の分化が一切見られないもの。樹冠部より下部に枝が見られたとしても，樹冠部において枝が見られなければ「枝なし」とみなす。

ここでは，幹先端部で枝が分化し始める始点に注目していることと，幹先端が閉じられているかどうかに関わらないという点で，上記の幹先端処理としての「派生型」，「放散型」とは異なっている。上述の分類基準によって，臨床心理学を専攻する大学院生 1 名に，筆者とは独立に分類してもらったところ，評定者間一致率は 90%であった。評定が不一致であったバウムに関しては，評定者間の協議の上決定した。友人関係の群ごとに，バウムの各類型の度数および出現率は Table9 の通りであった。

Table9
友人関係各群における枝の分化の類型の人数(人) ※( )内は群内での出現率(%)

群	枝あり				枝なし	計
	派生型	放散型		きざし		
		派生あり	派生なし			
HH群	13(27%)	6(13%)	13(27%)	1(2%)	15(31%)	48(100%)
HL群	0(0%)	0(0%)	12(71%)	1(2%)	4(23%)	17(100%)
LH群	7(23%)	5(16%)	10(32%)	2(6%)	7(23%)	31(100%)
LL群	7(50%)	0(0%)	2(14%)	1(7%)	4(29%)	14(100%)
計	27(25%)	11(10%)	37(33%)	5(5%)	30(27%)	110(100%)

②枝の有無：仮説4について

群ごとに，「枝あり」に分類された度数と，「枝なし」に分類された度数に有意な偏りが見られるかどうかについて検討するために χ^2検定を行ったところ(Table10)，有意な偏りは見られず($\chi^2(3,110)=0.86$,*n.s.*)，仮説4は支持されなかった。

Table10
友人関係各群における「枝あり」の度数(人)とχ^2検定の結果
※( )内は群内での出現率(%)　下段は期待度数(人)

群	枝あり	枝なし	計	*p*
HH群	33(69%)	15(31%)	48(100%)	*n.s.*
	34.91	13.09		
HL群	13(76%)	4(24%)	17(100%)	*n.s.*
	12.36	4.64		
LH群	24(77%)	7(23%)	31(100%)	*n.s.*
	22.55	8.46		
LL群	10(71%)	4(29%)	14(100%)	*n.s.*
	10.18	3.82		
計	80(73%)	30(27%)	110(100%)	

Table10より，各群69%~77%が「枝あり」に分類されており，全体では73%が「枝あり」に分類された。枝を分化させるということは，幹の内実やエネルギーを何らかの方向付けをして処理すること(奥田,2005)であり，本研究の協力者の多くが，自分の心的なエネルギーを何か感じ取り，分化させ，方向付けをしていることが推察される。またそのようなあり方は，友人との関わりに直接反映されるものではなく，「積極的関わり」のような相手に自己を表出するという形であらわされていなくとも，各々自己を分化させ，捉えようとしていると考えられる。

③枝の分化のあり方：仮説5について

i)「派生型」

Table9より，「派生型」に分類されるバウムは，HH群では27%，LH群では23%，LL群では50%の割合で見られるのに対し，HL群では一切見られなかった。

Table11
友人関係各群における枝の「派生型」の度数(人)とχ^2検定の結果
※( )内は群内での出現率(%)　下段は期待度数(人)

群	派生型	その他	計	*p*	多重比較
HH群	13(27%)	35(73%)	48(100%)	*n.s.*	
	11.78	36.22			
HL群	0(0%)	17(100%)	17(100%)	$p<.05$	派生型<その他
	4.17	12.83			
LH群	7(23%)	24(77%)	31(100%)	*n.s.*	
	7.61	23.39			
LL群	7(50%)	7(50%)	14(100%)	$p<.05$	派生型>その他
	3.44	10.56			
計	27(25%)	83(75%)	110(100%)		

群ごとに，「派生型」に分類された度数に有意な偏りが見られるかどうかについて検討するためにχ^2検定を行った結果(Table11)，有意な偏りが見られた($\chi^2(3,110)=10.66$,$p<.05$)。残差分析の結果，HL群において「派生型」が少なく，LL群において「派生型」が多く描かれることが示された。

枝から枝を派生させ伸ばしていく作業は，自分の心的なエネルギーを分化させ多方向に伸ばしていき，伸ばして外に出したものを，さらによく見て分化させるといったように，少しずつ徐々につかんでいく作業とつながると考えられる。HL群では，そのような動きは全くなく，枝を出してもそこで終わるため，一旦外に出したものをよく見て分化させていくことにはつながらないことが推察される。逆にLL群では，一旦外に出したものをよく見て徐々に分化させて，新たな自己をつかみとっていく姿勢が推察される。

ii)「放散型」

Table12
友人関係各群における枝の「放散型」の度数(人)とχ^2検定の結果
※( )内は群内での出現率(%) 下段は期待度数(人)

群	放散型	その他	計	p	多重比較
HH群	19(40%)	29(60%)	48(100%)	*n.s.*	
	20.95	27.06			
HL群	12(71%)	5(29%)	17(100%)	$p<.05$	放散型>その他
	7.42	9.58			
LH群	15(48%)	16(52%)	31(100%)	*n.s.*	
	13.53	17.47			
LL群	2(14%)	12(86%)	14(100%)	$p<.05$	放散型<その他
	6.11	7.89			
計	48(44%)	62(56%)	110(100%)		

枝から枝が派生するかどうかに関わらず，樹幹部で枝が一気に放散するように分化する度数が，各群で有意な偏りが見られるかどうかを検討するために，「放散型」に分類されたものとされなかったものとでχ^2検定を行った結果(Table12)，有意な偏りが見られた($\chi^2(3,110)=10.53, p<.05$)。残差分析の結果，HL群において「放散型」が多く描かれ，LL群において「放散型」が少なく描かれることが示された。

次に，「放散型」の中でも枝から枝が派生しないものに注目した。「放散型」の「派生なし」に分類されたものと，それ以外でχ^2検定を行ったところ(Table13)，有意な偏りが見られた($\chi^2(3,110)=13.70, p<.01$)。残差分析の結果，HL群において「放散型・派生なし」が有意に多く描かれることが示された。

Table13
友人関係各群における枝の「放散型・派生なし」の度数(人)とχ^2検定の結果
※( )内は群内での出現率(%) 下段は期待度数(人)

群	放散型・派生なし	その他	計	p	多重比較
HH群	13(27%)	35(73%)	48(100%)	*n.s.*	
	16.15	31.86			
HL群	12(71%)	5(29%)	17(100%)	$p<.01$	放散型・派生なし>その他
	5.72	11.28			
LH群	10(32%)	21(68%)	31(100%)	*n.s.*	
	10.42	20.57			
LL群	2(14%)	12(86%)	14(100%)	*n.s.*	
	4.71	9.29			
計	37(34%)	72(66%)	110(100%)		

また，Table9より「放散型・派生あり」は，HH群とLH群にのみ見られる特徴であった。このことからは，HH群やLH群では自分では自己感や自分の気持ちをしっかりと扱うに至らずに，一気に放出することがあったとしても，それをもとに自分なりに対象化し，扱っていくことがありえると考えられる。

このように，自分が一度出してしまったものを対象化し，自分のコントロール下におさめていく作業は，HH群やLH群に共通する「気づかい関係」のあり方，すなわち，自分自身がその場で表出したことを，それに対する相手の反応やその場の空気の中で敏感に対象化することで理解し位置づけ直し，次に自分をどう表出していくのか，どう方向づけていくのかということに気を配る態度としてあらわれていることが推察される。

これに対し，HL群ではそのような態度は見られず，自分の未分化な気持ちを無自覚のまま一気に放出してしまうことが多く，さらにはそれを手がかりに自分をつかんでいくことがないこと，LL群ではそもそも自分でもつかめないエネルギーを無自覚のまま衝動的に一気に放出してしまうこと自体がしにくいことが推察される。

以上から，仮説5の一部「HL群では，枝から枝が派生するバウムは少ない」は支持され，仮説5

の一部「HH 群では，枝が徐々に分化するバウムが多く見られる」は支持されなかった。枝が徐々に分化していくバウムは，HH 群ではなく LL 群で多く見られた。

枝の出し方は，自分の心的エネルギーを掬い取り，それを自分なりにつかみとりながら，外に向かって出していくあり方であり，それは自分自身をどうつかみとって，あるいはつかみとろうとして相手に関わっていくかという姿勢とつながると考えられる。枝の分化は見られないと予想された LL 群は，むしろ枝が細かく分化・派生していくことが示され，相手に対して積極的に関わりを持とうとする姿勢は見られにくくとも，自分自身を慎重につかみとっていく姿勢が推察される。

3) 幹の空白・描き込み

①幹の空白・描き込みの分類

協力者 110 名分のバウムを，幹への描き込みの有無によって「空白」と「描き込みあり」に分類した。具体的な分類基準は Table14 の通りである。

この分類基準によって，臨床心理学を専攻する大学院生 1 名に，筆者とは独立に分類してもらったところ，評定者間一致率は 100%であった。

Table14
幹への描き込みの有無の分類基準

バウムの類型	説明
1)「空白」	幹部分に何も描かれず，空白のままになされているもの。
2)「描き込みあり」	幹部分にうろ，陰影，樹皮，模様など，何らかの描き込みがなされているもの。根を示す線など，根の部分への描き込みは，幹への描き込みとはみなさない。また，バウム全体が黒く塗りつぶされているものは，幹部分が空白でないという点で「描き込みあり」に分類。

②幹への描き込みの有無：仮説 6 について

群によってそれらの出現度数に有意な偏りが見られるかどうかについて検討するため，χ^2検定を行った(Table15)。その結果有意な偏りが見られ($\chi^2(3,110)=8.75, p<.05$)，多重比較の結果，HH 群では「描き込みあり」が多く，HL 群では「空白」が多いことが示された。

このことから，HH 群は，より自己感や，実感，葛藤をリアルに感じやすく，HL 群ではそのような自分の感覚を感じ取りにくく，立ち止まりにくいということが考えられる。友人に積極的に関わることで自己確認をしている側面があると考えられるが，それらがリアルに自分のものとして感じられるには至っていないのかもしれない。

Table15
友人関係各群における幹の「空白」の度数(人)とχ^2検定の結果
※( )内は群内での出現率(%) 下段は期待度数(人)

群	空白	描き込みあり	計	p	多重比較
HH群	17(35%) 23.13	31(65%) 24.87	48(100%)	$p<.05$	空白<描き込みあり
HL群	13(76%) 8.19	4(24%) 8.81	17(100%)	$p<.05$	空白>描き込みあり
LH群	16(52%) 14.94	15(48%) 16.06	31(100%)	*n.s.*	
LL群	7(50%) 6.75	7(50%) 7.30	14(100%)	*n.s.*	
計	53(48%)	57(52%)	110(100%)		

以上から，仮説 6 は「HH 群では幹への描き込みは多いだろう」は支持され，「LL 群では幹の空白が多いだろう」は支持されなかった。LL 群では，幹への描き込みは半数見られ，自己感や実感，自分の感覚を感じている人が必ずしも少なくないことが推察される。

3. 友人関係各群に見られるバウムの特徴

友人関係各群におけるバウムの特徴を見出し，群ごとにそのあり方について考察する。これまでの幹先端処理および幹の空白の観点から見出された各群の特徴はTable16の通りであった。

Table16
友人関係各群において統計的に有意な偏りが見られた特徴

群	特徴
HH群	「空白」<「描き込みあり」
HL群	幹先端の「放散型」>その他 枝の分化の「派生型」<その他 枝の分化の「放散型」>その他 枝の分化の「放散型・派生なし」>その他 空白>「描き込みあり」
LH群	なし
LL群	枝の分化の「派生型」>その他 枝の分化の「放散型」<その他

1) HH群の特徴

Table16より，幹先端処理の観点からは，はっきりとした特徴は見出されなかった。また，幹への描き込みが多いことが示された。以上のことから，この群の特徴として，自分という実感や葛藤，主体的な感覚を感じやすい面があることが推察される。それらを感じつつも，何かをつかんで枝をしり，幹を閉じることで自分なりのまとまりをつけたりするなどの対処が出来ることもあれば，沸き起こってきた何かをつかまえることが出来ず枝を出すことにつながらないなど，心のレベルでの取り組みの仕方やつまずき方には，群内で幅があると考えられる。自分自身の本体から沸き起こる感覚や葛藤に敏感であることが，その疑問や感覚や悩みを相手に出したり，その場の雰囲気に敏感になったりする関わりにつながっていると考えられる。

2) HL群の特徴

Table16より，この群の特徴としては，幹先端の一時点で一気に放散状に枝分かれして，すぐにその枝先が閉じられる「放散型」が多い。また，枝の開放・閉鎖を問わない際も枝分かれの仕方として「放散型」が多いこと，枝の先の処理として，さらなる枝分かれが見られるものを省いた場合の「放散型・派生なし」が多い。また，枝分かれした後にさらに枝分かれする「派生型」は少ないことが示された。これらのことから，この群の特徴として，幹先端の処理として枝を出すことが選ばれるが，その枝は一時点で一気に分化し，すぐに閉じることが多いこと，閉じないバウムを含めても，他の群よりもそのような枝分かれの仕方が多く，その後枝が分化するという方法は選ばれないといえる。また幹は空白のままにされている。以上より，この群は，自分の心的エネルギーのようなものを感じ取りにくいままに，一気に無自覚に放出しやすいこと，その放出したものを材料に自分をつかむという姿勢が少ないことが伺える。枝を出すということは，自分自身を方向付け，何かしらをつかむことが出来る側面があると考えられるが，放散状に枝分かれし，徐々に分化されることが一切ない点や，幹への描き込みが少ない点から，それらは無自覚なままになされており，出したものをもとに新たな自己をつかみとっていくということも少ないと考えられる。一方で，幹先端

が閉じる「放散型」が多いことからみても，自分のまとまりをつける力があると考えられる。このように自己を安定して捉えられていることや，一気に自己表出して相手と切っていくことで自己を成立させているあり方が，一方では相手に積極的に関わっていけることに，一方では相手や場の空気を気遣ってその場面を対象化して捉えることの難しさに現れていると考えられる。

3) LH 群の特徴

Table16 より，幹先端処理および幹への描き込みの観点からは，他の群と比較した際の統計的に有意な特徴は見出されなかった。同じ友人関係パターンとされた中で，幹先端処理で問題にされるような，相手と自分とをどう切り分けていくかという課題や，自分をどうつかみ，それを相手にどう出していくかといった課題への取り組み，あるいは，幹への描き込みで示される自己感や葛藤のようなものを感じやすいかどうかという，課題への取り組み方には幅があると考えられる。「積極的関わり」傾向が低く，相手に自分をどう出してよいか分からない側面がある一方で，「気づかい傾向」が高く，相手やその場の空気を敏感に感じ取りながら自分を出すという側面もあるため，この群に類型化された協力者の中で，どのような作業が行われているかが異なっていたのであろう。

4) LL 群の特徴

LL 群は，Table16 より，「派生型」が多く，「放散型」が少ないことから，徐々に枝を派生していく特徴があると考えられる。これらのことから，この群の特徴として，自分の心的エネルギーに無自覚のまま一気に放出してしまうことは苦手であり，徐々に自分を確実につかんでいこうとしていることが考えられる。LL 群は，友人との深い関わりも，表面的な関わりも避けており，外から見れば希薄な友人関係であると見られがちな群であると考えられる。しかし，友人関係を避けることで自分の新たな面が見えることを避けているのではなく，むしろ新たな自己像を，自分自身の手によって確実につかもうとするがゆえに，友人との関わりを重要視しない側面があると考えられる。また，いつも自分のペースで自分をつかみとっていたいために，友人との関わりの中で，自分がつかめなくなることをおそれている可能性があると考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究では，バウムテストに見られる特徴を検討することで，友人関係パターンに特有の，心的なレベルでの自-他のあり方について考察した。

HH 群や LH 群では，心的な自-他のあり方の大きな指標であると考えられる「幹先端処理」の観点からは，はっきりとした特徴が見出せず，それぞれ複数の特徴が混在していた。HL 群や LL 群では，「幹先端処理」の観点から比較的明確な特徴が見出されたが，それとは異なる特徴のバウムも，出現度数をみるとやはり無視できない。このことから，量的指標では同パターンとされる友人関係であっても，自己・他者への関与のあり方や，他者との間で自己をつかんでいく取り組みには各々幅があると考えられる。本研究は調査協力者を 4 群に分類したため，各群の人数が少なかったことも，はっきりとした特徴が見出されにくかった一要因であろう。今後の課題として，より人数を増やし，同パターンとされる友人関係の中での質的差異について検討していくことが必要となる。

また，量的指標から読み取ることのできる特徴をもとに立てられた仮説は必ずしも支持されず，想定できない特徴が見出された。このことから，量的指標で捉えられる友人関係のあり方からは想

像できない範囲の心の作業のあり方を見出すことができたといえる。このことは，青年の自己を探求する課題への取り組みやそのつまずきについて理解していく際に，単に“浅いか深いか”という目で判断するには限界があることを示唆していると考えられる。今後はこうした質的検討を重ねることで，青年のつまずきや取り組みなどの心のあり方の理解・サポートにつなげていくための観点を増やしていくことが必要である。

引用文献

Damon,W. (1983). *Social and personality development*. Norton. 山本多喜司(編訳) (1990). 社会性と人格の発達心理学 北大路書房

藤岡喜愛・吉川公雄 (1971). 人類学的に見たバウムによるイメージの表現 季刊人類学, **2**, 3-28.

岸本寛史 (2002). 幹先端処理と境界脆弱症候群 心理臨床学研究, **20**, 1-21.

Koch,K. (1949). Der Baum Test. Bern: Huns Huber. (Koch,C., 1952, The Tree Test). 林勝造，国吉政一,一谷彊(訳) (1970). バウムテスト－樹木画による人格診断テスト－ 日本文化科学社.

町沢静夫 (1992). 成熟できない若者たち 講談社

松下姫歌 (2005). 精神病院での心理臨床におけるバウムの意味について 山中康裕，皆藤章，角野善宏(編) バウムの心理臨床 創元社 Pp248-275.

松下姫歌 (2006). バウムテストに見られる肥満児の心理的特徴 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, **55**, 219-226.

岡田努 (1991). 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学, **1**, 11-18.

岡田努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, **5**, 43-55.

岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.

岡田努 (1998). 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 教職研究, **9**, 29-39.

岡田努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, **47**, 432-439.

小此木啓吾 (1980). シゾイド人間 - 内なる母子関係をさぐる 朝日出版社

奥田亮 (2005). 幹先端処理において体験されうること－幹先端が描き手に何を引き起こすか 山中康裕，皆藤章，角野善宏(編) バウムの心理臨床 創元社 Pp182-197.

鶴田英也 (2005). 本研究の目的と位置づけ－バウムとの関わりの諸相 山中康裕，皆藤章，角野善宏(編) バウムの心理臨床 創元社 Pp152-181.

山川裕樹 (2005). 幹先端処理の重要性 山中康裕，皆藤章，角野善宏(編) バウムの心理臨床 創元社 Pp222-238.

山中康裕 (1976). 精神分裂病におけるバウムテストの研究 心理測定ジャーナル, **12**, 18-23.

吉田芙悠紀・松下姫歌 (2007). 現代大学生の友人関係と Connected-Self および Separated-Self の関連 日本青年心理学会第 15 回大会発表論文集, 42-43.